蒲田の空の下

**100年前の蒲田で
俳優もスタッフも監督も
みんなで映画を作った日々**

1世紀前の、映画人たちの姿。監督や俳優、撮影所を支えた人たち。蒲田の空の下感極まって溢れる涙、不意に起こる笑い声。彼らが映画に情熱を注ぎ続けた毎日。今も「映画」には、何かを灯してくれるようなわくわくや感動、消えない期待感がある。それはきっと、100年前からの映画人が、フィルムに命を吹き込むことに成功した証しなのだ。

多摩川園

池上本門寺

多摩川

▲馬込文士村（作家、芸術家が暮らす）
▲田園調布
▲多摩川園（遊園地）
▲池上本門寺
▲多摩川
▲松竹キネマ蒲田撮影所
▲羽田（海水浴／潮干狩り）

大森 映画ロケ地の宝庫だった蒲田周辺

大正～昭和初期の大田区は、海や川に農村、漁村風景に加え、歴史ある寺社も多くあり、日帰り行楽地としてにぎわっていた。作家・芸術家らが集い暮らす馬込文士村、羽田の海辺、多摩川、池上本門寺や近隣の住宅街など、撮影所近隣には多彩な環境があった。それらは、映画制作者へ様々なインスピレーションを与え、多くのロケ地を提供していたに違いない。

蒲田

撮影所にて。監督・野村芳亭（中央）と仲間たち

「大人の見る繪本 生れてはみたけれど」（1932年）撮影合間のひと時。小津安二郎と出演子役たち

大田観光協会資料・イベント

松竹キネマ蒲田撮影所と蒲田モダンの時代に浸る

冊子 **蒲田Cinema Graph「キネマの天地」・創造物語**
～城戸四郎と仲間たち～

100年前の蒲田に出現した「松竹キネマ蒲田撮影所」。その誕生秘話、撮影所開設や映画制作に尽力した人々、日本映画史上どのような功績があったのか、写真も多く使い、眺めるだけでも楽しい一冊。

イベント **「蒲田映画祭」**

毎年、9月、10月に開催。撮影所の跡地アプリコをはじめ蒲田駅周辺の会場で上映会や映画人のトークショーで盛り上がる。今年は新型コロナウイルス流行の影響が懸念される中、鋭意準備中。

KAMATA CINEMA

いずれも、大田観光協会までお問い合わせください。

1920 大正9年6月 松竹キネマ蒲田撮影所 開設

開設以来、16年という短い期間に約1,200本もの映画を生み出している。

『虞美人草』1921年

「松竹キネマ蒲田撮影所」ジオラマ
大田区立郷土博物館所蔵

羽ばたく！「映画女優」たち

記念すべき第1作『島の女』（1920年）は準備不足もあり特別試写会は大失敗。唯一の収穫が川田芳子の登場だった。

第1作『島の女』に起用された川田芳子

島の女

松竹キネマ蒲田撮影所が世に送り出した「映画専門女優」の活躍は、多くの人々を虜にした。

城戸四郎の登場とディレクター・システム

『お父さん』1923年

それまで日本では「スター第一主義」で撮影が行われてきたが、台本を軸に監督主導・スタッフ総出で作る新しいスタイル「ディレクター・システム」が用いられた。

『親父とその子』1929年

「松竹キネマ蒲田撮影所」開設10周年記念映画。主題歌は「蒲田行進曲」。

「松竹蒲田調」という価値観

『和製喧嘩友達』1929年

英雄譚ではなく、市井（しせい）の人々の日常のなかに見いだす希望やおもしろさ。温かみのある作風は、「松竹蒲田調」として、現在にも受け継がれている。

映画を指揮する小津安二郎

ついに本格的「トーキー映画」が完成！

『蝕める春』1932年

今でこそ当たり前の「スクリーンから聞こえてくる声や音楽」。日本でこれを本格的に実現した作品が『マダムと女房』（1931年）だった。

青春図会
マダムと女房

大船へ移転 1936 昭和11年

松竹キネマ蒲田撮影所が走り続けた16年。その短い間にも大田区の近代化は加速していった。それに伴い騒音などが増し、撮影環境が悪化したため、撮影所は神奈川県の大船へと移転することとなった。

大船撮影所の案内絵葉書

日本に「映画」の撮影所を！

大谷竹次郎

大谷竹次郎。「松竹キネマ蒲田撮影所」誕生への第一歩は、この男が踏み出した。父は相撲興行を、母は芝居小屋を営む、一卵性双生児の弟として明治10（1877）年に京都に生を受けた。兄弟（**松**次郎と**竹**次郎）は20代で京都随一の興行師となり上京する。殴り込みと形容される凄腕（すごうで）で、劇場や役者を次々と傘下に引き入れ、歌舞伎座買収をめぐる闘いは日本演劇史の一大事件として語り継がれている。

そんな竹次郎が、第一次大戦終了後に訪れた"活動写真ブーム"を見逃すはずもなく、大手映画会社が日活1社の今こそ、と映画界に打って出ることを決意したのだった。

「映画の街・蒲田」の始まり

松竹キネマ蒲田撮影所開設

当初、撮影所候補地として、井の頭公園付近、東海道線「国府津」付近や埼玉県の大宮公園などがあったが、竹次郎が選んだのは「蒲田村」であった。大正9（1920）年6月11日、8,000坪の土地を確保。湿地帯に囲まれた水はけの悪い場所ではあったが、東京へ交通の便も良く、池上本門寺や多摩川、羽田などのロケーションの豊かさも決め手となった。

ここに集いし人々の情熱が活動写真を「映画」にした

東洋のハリウッドを目指して

「東洋のハリウッド」をスローガンとした大谷竹次郎は、撮影所設立の布石として、撮影所開設前年には弟の白井信太郎と関係者をハリウッドへ派遣し実状視察をさせていた。

開設当初の撮影所は、広場に床板を敷き、四方に柱を建て周囲を天幕で囲ったようなもので、光線はカーテンの開け閉めによる太陽光頼み。人工のライトも、反射板もなかった。遅々として進まない撮影。やはり映画撮影の現場で活躍する人材が必要と判断し、既にハリウッドで評価を得ていた監督兼カメラマンの日系二世、ヘンリー・小谷と契約した。

ガラス張りのグラスステージでの撮影風景（ジオラマ）

さらに、技術者、従業員を募集。大戦後の不景気の影響もあり希望者が殺到した。俳優も、240名に及ぶ応募者から男子25名、女子11名を採用。新劇の第一人者、小山内薫を「松竹キネマ研究所」の校長として、俳優や映画制作者の人材育成を推進した。

当時活動写真では、歌舞伎のように女性を男性が演じていたが、そこに無理を感じていた竹次郎は、映画専門女優の候補探しに奔走し、第1作『島の女』には、新橋で美人芸妓（げいぎ）として知られた川田芳子を起用。後の「女優の松竹」の第一歩となった。

映画専門の俳優を養成

映画俳優と「女優ブーム」

撮影所開設の翌年、大正10（1921）年公開の『虞美人草』は日本初のスペクタクル大作として大ヒットを記録した。その最大の要因が後に「日本の恋人」と呼ばれるほどの人気となった主演女優、栗島すみ子の存在だった。これまで歌舞伎の延長で、女形の芝居が当たり前だったスクリーンに、みずみずしい松竹蒲田の女優たちの姿はどれほど衝撃的だったことだろう。

人気女優のブロマイドは飛ぶように売れ、彼女たちの人気とともに「松竹」の名は浸透していった。

舞台劇と異なる点の多い映画で活躍する俳優養成に力が注がれ田中絹代、桑野通子、岡田時彦、高田稔といったスターを数多く輩出した。

栗島すみ子主演の『水藻の花』（1923年）

栗島すみ子

現場が主役の映画に

城戸四郎とディレクター・システム

城戸四郎

城戸は築地生まれの江戸っ子。気風（きっぷ）良く、豪放磊落（らいらく）かつ繊細。一高時代は野球に打ち込む一方で、寄席や芝居小屋にのめり込んだ。

実家が築地で営む洋食レストラン「精養軒」は松竹本社のほど近くにあり、大谷竹次郎は店の常連だった。竹次郎は四郎の頭脳と気性に惚れ込み、ぜひとも身内にしたいと熱望した。一方、四郎はすでに大手銀行への就職が内定しており、いまだ一般社会では認知が薄かった映画に対して全く関心がなかった。しかし眼光鋭く口説きに口説く竹次郎の熱意に四郎の心は傾き、遂に未知の世界であった映画界へ身を投ずる決心をした。四郎は心の中で強く誓った。「よし、俺の手で映画の社会的地位を高めてみせよう」。

設立当初の「松竹キネマ蒲田撮影所」

城戸は大正13（1924）年、関東大震災の被害が残る、蒲田撮影所の所長に就任。彼は撮影所の隅々まで歩き回り、大道具、小道具、衣装といった所員との交流を大事にした。スタッフたちの映画作りへの情熱、俳優の演技に対しての確かな眼力。"映画を作るのは彼らである"と痛感した城戸は、撮影現場から「スター第一主義」を排除した。撮影所組織を監督が頂点となるピラミッド方式に改編、脚本の充実を図り、俳優と共に照明、美術、音響などすべての関係者との打ち合わせを綿密に行ってから撮影に臨んだ。この「ディレクター・システム」は映画制作のスタンダードとなった。

人々の日常にドラマを見いだす映画

これぞ「松竹蒲田調」

家庭的な雰囲気の「松竹キネマ蒲田撮影所」が生み出してきた多くの作品。当時の映画ジャーナリズムは松竹映画に漂う味わいを「松竹蒲田調」と名付けた。城戸四郎が述べた「松竹蒲田調」の具体的な説明を聞いてみよう。「映画の基本は救いでなければならない。弱者を温かく見つめ、ユーモアとペーソスで日常を描き、お客さまにホッとした気持ちを持っていただける映画を松竹は目指しています」。

松竹キネマ蒲田撮影所が育てた

あの映画人たち

小津安二郎

蒲田の撮影所からは後世に名を残す有名な映画制作者たちが数多く巣立っている。小津安二郎の唯一の師匠とも言われる**大久保忠素**。チャップリンの映画『サーカス』の現場を手伝う研究熱心さを見せた**牛原虚彦**。人気女優の栗島すみ子と結婚し、彼女の出演作品72本を手がけた**池田義信**。「日本の喜劇王」とも呼ばれ、山田洋次監督と渥美清が『男はつらいよ』の主人公の名前にと懇願した**斎藤寅次郎**。日本で最初の全編トーキー映画『マダムと女房』を世に送り出した**五所平之助**。そして、今も国内外に多くのファンのいる『東京物語』などの**小津安二郎**。映画人からも高い評価を受ける**成瀬巳喜男**。監督の他にも多くの脚本、美術、音楽製作者が育っていった。

成瀬巳喜男